生産性新聞　～　グローバル・ビジネス　トルコ編　～

（財）日本生産性本部の機関紙『生産性新聞』にトルコに関するコラムが、3回にわたり掲載されました。　　2001年4月5日

２０１０年（平成２２年）３月１５日

グローバルビジネス《19》

トルコ編①

オフィス オーキタ 代表
経営コンサルタント
大喜多 富美郎

『文明の十字路』に位置し、国際政治での存在感が増す

トルコの経済情勢と世界政治の中での存在感

次期冬季オリンピック開催地のソチはロシアの有名な保養地で、黒海の北側に面している。トルコはその黒海の南側で、ロシアをはじめ、旧ソ連や東ヨーロッパの黒海沿岸5カ国を、地中海などの外洋につなぐボスポラス海峡の両側に位置している。また、ボスポラス海峡は、アジアとヨーロッパの結節点であり、アフリカや中東地域とも交差する位置にあるため、古来東アジアも含め世界中のヒト・モノ・カネ・情報が行き交う、まさに文明の十字路なのである。

トルコ民族は、モンゴル高原の遊牧民たちが8～10世紀ころイスラム教徒に改宗し、中央アジアからさらに西に移動してきたとされ、15世紀から20世紀にかけてヨーロッパとアジア、アフリカを支配したオスマン帝国が、現在のトルコ共和国の前身である。

トルコ共和国は1923年に成立し、日本の約2倍の国土に約7000万人が住んでいる。トルコ経済は過去何度も危機に直面し、不安定な状態が続いていたが、21世紀初頭に現在の公正発展党内閣が発足し、国際通貨基金などの国際機関との協調路線や、デノミなどの思い切った経済政策を採用すると同時に、グローバル化に伴う世界経済の成長の波にのり、2002年から06年までの5年間の国内総生産（GDP）は、平均7・4％成長を達成している。

しかし、08年は世界同時不況のあおりを受け、GDP成長率は0・9％と低下している。さらに、09年は第3四半期が前年比マイナス3・3％と悪化し、通年ではマイナス5～6％のマイナス成長となったようである。

トルコ経済の回復には、EUや、周辺諸国の経済回復が欠かせないが、09年の輸出が前年比22・6％と落ち込んでいる中で、イラク向け輸出が同23％増の51億ドル、エジプト向けは同84％増の26億ドルと、金額はともかくとして大きく伸びていることは、この地域におけるトルコの役割が大きくなってきていることのあらわれと考えてよいであろう。

09年4月、米国のオバマ大統領は、就任後初の単独訪問国としてトルコで、ギュル大統領、エルドアン首相などと会談し、トルコの国会で演説を行った。トルコは、イラクに隣接する大国として大きな影響力を持つばかりでなく、オバマ大統領が解決を急ぎたいアフガニスタンと、それに大きくかかわっているパキスタンとも近い関係にある。米国のアフガニスタン政策遂行に、NATO（北大西洋条約機構）の一員としてアフガニスタンの国際治安支援部隊（ISAF）の中心的役割を担っているトルコの協力は欠かせないのである。

また、トルコはイスラム教徒の国ではあるが、米国の中東政策の中心にあるイスラエルと経済的にも軍事的にも協力関係にあり、イスラエル空軍はトルコ中部で訓練を行っている。このトルコとイスラエルの関係が、09年ダボス（スイス）の世界経済フォーラムでイスラエルのペレス大統領と激論になったトルコのエルドアン首相が、セッションの最中に席を立つという事件を契機に非常に微妙な状態になっている。米国政府としてはトルコが反イスラエルになると、イスラエルの孤立を深める結果になるため、なんとしても避けたいところである。

一方で、米国内では連邦議会が、旧オスマン時代のアルメニア人問題を取り上げるなど両国関係は不透明な状況である。アラブ諸国も02年にトルコではイスラム系とされている公正発展党が政権について以来、交流を活発化させており、特にダボス会議事件以降は、アラブ諸国民のトルコ政府への支持が高まっており、国際政治の舞台でのトルコの存在感はより大きくなっている。

（3回掲載）

２０１０年(平成２２年)３月２５日

グローバルビジネス《20》

トルコ編 ②

重要性増すトルコを通過するパイプライン

オフィス オーキタ 代表
経営コンサルタント
大喜多 富美郎

トルコのエネルギー回廊戦略

アガサ・クリスティーの小説『オリエント急行殺人事件』は、シリアのアレッポ駅から始まる。列車はトルコのアジア側を横断し、ボスポラス海峡を渡り、イスタンブールのサルケジ駅から出発したオリエント急行内で殺人事件が起こる。乗客の国籍は、多彩で、当時もイスタンブールがヨーロッパとアジア、中東を結ぶ重要なハブであったことが感じられる。

現在のトルコでも、鉄道、高速道路、航空路などが整備され、黒海と地中海を結ぶ海路とともに、国内のみならず周辺諸国を結ぶ重要なネットワークを構成している。

近年、トルコが力を入れているのが、エネルギーの大消費地である欧州と、産出地の中東、中央アジア、ロシアなどをトルコ経由のパイプラインで結び、安定的に供給するネットワークを構築するというエネルギー回廊戦略である。石油、ガスなどのエネルギー資源の純輸入国であるトルコには、ロシアをはじめ周辺の産出国からのパイプラインが整備されている。

現在でも、イラクやカスピ海油田などから、石油をトルコ南西部の地中海に面するジェイハンにパイプラインで輸送し、タンカーで輸出している。ロシアから黒海経由ジェイハンに石油を運ぶ計画もある。また、欧州は天然ガスの消費量の約4分の1をロシアもしくはロシア経由で輸入しているが、現在はウクライナがロシアから欧州への主要なガス・パイプラインの通過地となっている。

しかし、ウクライナは過去何度も天然ガス問題でロシアとトラブルをおこしている。2008年末から2009年の初頭にかけて、ロシアがガスの供給を止め、中南欧が燃料不足で苦境に立たされたことをご記憶の方も多いだろう。こうしたリスクを考慮すると、欧州にとって天然ガスの安定供給路を増やすことは重要な課題である。

トルコを通して輸送する新ルートは、欧州にとっても、イランや、湾岸諸国、中央アジアなどの自国産エネルギー輸出を拡大したい産出国にとっても、魅力的なものである。

欧州とトルコを結ぶガス・パイプライン計画はいくつかあるが、その中でも実現した場合のインパクトが大きいのはナブッコ・パイプライン計画であろう。ナブッコは、欧州連合（EU）も天然ガスのロシアへの過度な依存を避けるために推進しているプロジェクトで、トルコからブルガリア、ルーマニア、ハンガリーを経由してオーストリアまで約3300キロをパイプラインで結ぶ計画である。昨年7月にトルコの首都アンカラで、前記関係5カ国の政府がナブッコの基本合意書に署名している。

一方、ロシアもウクライナのリスクを避けると同時に、ナブッコによるロシア回避策に対抗して、黒海を横断して直接ブルガリアにパイプラインを通すサウス・ストリームという計画を推進している。トルコはこのサウス・ストリームに対しても協力姿勢を示すなど、エネルギーの通過国としての立場を強化するための選択肢を増やしている。この地域のエネルギー輸送については、関係各国の政治的・経済的思惑が複雑に絡み合っており、トルコのエネルギー回廊戦略の実現までには今後も紆余曲折があるだろう。

しかし、長期的にはアゼルバイジャン、トルクメニスタン、イラク、イラン、エジプトなどからの天然ガス輸送に、ナブッコをはじめトルコを通過するパイプラインの必要性はさらに高まっていくであろう。

また、カタールが液化天然ガス（LNG）の大産出国として登場しつつあり、LNG受け入れ基地を持つ、トルコの役割がさらに重要になってくる可能性もある。

２０１０年(平成２２年)４月５日

グローバルビジネス《21》

トルコ編

トルコと日本の協力 ～アジアの価値観

オフィス オーキタ 代表
経営コンサルタント
大喜多 富美郎

トルコを訪れた日本人の多くはトルコの人たちの親切さに驚かされる。トルコ人の親日性について解説されるとき、120年前のトルコの軍艦エルトゥールル号の紀州沖遭難事件で、地元串本の住民が総出で遭難者を救助したことが、いつも最初にあげられている。

確かに、トルコは世界でも有数の親日的な国である。しかし、われわれ日本人がトルコについてどれくらい理解しているかというと、やはり「遠い国」であり、トルコ側との温度差が大きいのは残念である。日本もそうであるが、トルコ人は東西の文化をうまく取り入れ、自分たちの

③

文化と融合させている。イスラム教についても、政教分離という国是のもと、自分たちの生活の中に溶け込ませると同時に、西欧社会的な合理的思考にも対応していることなども日本人の宗教の取り入れ方と似たものを感じる。

また、家族を大切にすることも、日本人が失いかけている何かを感じさせる。トルコ人の方が物事を善と悪などの二元的に考える傾向が強いようであるが、トルコ人の見せてくれる親日的な態度は、歴史上の出来事よりももっと深いところで結びついているような気がする。

そのトルコは前2回でも述べたように、世界の中で存在感が増している。わが日本は失われた10年どころか、いまだにバブル崩壊の後遺症を引きずりながら、将来の方向性が見いだせずに苦しんでいる。かつて21世紀の世界をリードすると言われた日本経済はデフレに悩まされ、国内総生産は今年中に中国に抜かれることが確実となっている。

"アジア的価値観"共有できる地域の再生を

学生の就職活動は厳しい現実に直面し、産業界も雇用維持に精いっぱいである。経済だけでなく、長引く政治の混迷も、国際社会での日本の評価を低下させている。日本人は若者・中高年を問わず内向き志向が強くなり、まるでブラックホールのように出口の見えない状態に自分から追い込んでいるようだ。

その一方で、筆者は過去数十年にわたり海外の日系企業で、現地の人たちと協力しながら活躍しているたくさんの日本人を見てきたが、彼らの多くは言葉も文化も異なる外国で、障害を乗り越えながら、失敗も糧にして前向きに取り組んでいる。日本人の海外居住者は、全人口の1%にも満たない状況だが、彼らの頑張りにより、日本の所得収支の黒字は貿易収支を上回る状況になってきている。

こういう時代に、日本に住んでいる日本人が内向きになっていてよいのだろうかと考えてしまう。世界中で国境による障壁はさらに低くなりつつあり、日本人は世界に向かった、外向きの広い視野をもつよう努めるべきである。

トルコと日本は、アジア大陸の東西の両端にあり、古くからシルクロードや、海上交易路を通じて結ばれてきた。海洋貿易の共通言語であったともいわれるマレー語には、アラビア語や日本語とも共通の言葉や、表現方法が見られる。近代史の中で西欧列強による植民地化や、その後の民族主義運動などにより、この大きな回廊は分断されてしまったが、本来アジア人としての共通の価値観を持てる地域なのである。現在この地域には、イラクやアフガニスタンに限らず紛争地域がたくさんある。また、経済的な格差が社会を不安定にしている国も多くある。

しかし、中長期的には日本とトルコを結ぶ地域内にある国々の多くは、潜在的に高い経済成長力を持っている。トルコと日本が協力して、これらの国々や地域の安定的な成長に貢献していけば、アジア的価値観を共有できる地域を再生することができるのではないだろうか。

（トルコ編おわり）